

雑纂

三国志迷いの旅（三）——湖北の旅——

前川 貫治

西塞山懷古

二〇〇〇年七月三十日九時半、武漢を出発、東に向かう。車はなぜか公路局の吉普^{ジープ}、乗っているのは我々夫婦と全線ガイドの崔氏、そして武漢の地元ガイド・張氏である。

張氏とは二年前（一九九八年）に鄂州^{がく}で会っている。わずか二泊三日のつきあいだったが、誠実で、しかも手際よく仕事をこなす姿が印象的だった。今回、武漢を起点に襄樊^{じょうはん}・宜昌・荊州を回ると決めた時、我々は真つ先に張氏の顔を思い浮かべた。崔氏も同じ結論に達したらしく、ガイドは張さんでないとダメです、と注文をつけたそう

だ。張氏は三十一歳、短く刈り上げた髪型と丸い大きな目、人なつこい笑顔は変わらない。ただ二年前の記憶に比べ、ずつと小柄だったのが意外だった。

十一時、黄石の市街に入り、高速道路を降りた。長江に沿った通りを東、つまり下流に向かって走る。大きな製鉄工場とそこから港に続く引き込み線がある。またまた運転手氏が道を聞いている。おじさんはまっすぐ前方を指し示した。工場の塀が切れ、町並みもどぎれたところで左に折れ、車は砂利道に入った。長江の堤防に作られた道である。だがしばらく走ると、何本ものパイプが道をさえぎっていて、それ以上進めない。大小さまざまなパイプは、橋桁のような整然とした

形で長江に向かって延びている。その先は浮き棧橋だった。車を降りる。

あれです、と張氏が手で指したのは、長江の岸からまっすぐにそびえる山である。山肌は樹木でおおわれ、山頂には四阿^{あすまや}と思しき屋根が見えた。

十一時十五分、張氏が先頭に立って歩き出す。堤防を下り、パイプの下をくぐって川沿いの道に出た。小さな寺をすぎる。少しづつ切り立ってきた川岸に長江の波が寄せ、かすかな水音を立てている。木々の間を抜けると、正面の岩肌に「西塞山」の文字が現れた。付近はやや開けた地形で、岩に彫りこまれた朱色の文字に目が射している。そばにある四阿^{あすまや}で、家族連れが休んでいた。

軽々と登る張氏の後を追う。このところ運動不足の崔氏は、うちの奥さんと一緒に少し遅れてついてきた。空は曇り、川風が吹き、道は木陰をたどっていて、ずいぶん救われる。しかし踏み出すごとに汗がしたたり、足が重くなる。

十二時、山頂着。四阿^{あすまや}がある。北望亭という。手すりにもたれ、足下の長江を見下ろす。西塞山は長江にせり出した岬だった。河幅はここかなり狭まり、その上流と下流で、河は大きく蛇行している。この山上に砦を築けば、長江を上り下る船の姿をことごとくとらえることができるだろう。見下ろす流れは速く、岸に近いあたりで小さく渦を巻いていた。水は濃い茶色や浅い茶色、白っぽい色からみあい、

複雑な模様を浮かべて流れる。そこへせり出した山肌の緑がひとときわ
鮮やかだった。

——これは登ってみないとわからないわ。
うちの奥さんがあえぎながらいった。

——先生、西塞山には有名な詩がありましたね。あの作者は崔顥（さいこう）
でしたか。

崔氏が聞く。

——いえ、劉禹錫（りゅうぎょく）です。

——あ、そうでしたか。

西塞山は呉を建国した孫策が劉表の部下・黄祖を破った古戦場であ
る。しかしこの名が人々に知られるのは、唐の詩人・劉禹錫（りゅうぎょく）の詩によ
る。「西塞山懷古」という。晋が呉を滅ぼし、三国が一つになった瞬
間を詠んだ傑作である。

王濬（しゅん）の樓船（ろうせん） 益州より下り

金陵（きんりやう）の王氣（おうき） 黯然（あん）として収まる

千尋（せんじん）の鉄鎖（てつさ） 江底（かうてい）に沈み

一片（いつぺん）の降幡（かうはん） 石頭（しやうと）に出ず

人世（じんせい） 幾回（いくかい）か往時（わうじ）を傷む

山形（さんぎやう）は旧（きう）に依りて寒流（かんりゅう）を枕（まくら）とす

今（いま）従（よ）り四海（しやい）家（け）と為（な）る日（ひ）

故壘（こるい） 蕭々（しやうしやう）として 蘆荻（りうてき） 秋（あき）なり

前半四行は天下統一の経緯（けいゐ）を述べる。

太康元年（西暦二八〇年）、晋軍は六路に分かれて呉へ殺到した。
王濬（しゅん）率いる船団は益州、おそらくは江州（現・重慶）から長江を下
った。呉はその侵攻に備えて、三峡、おそらくは巫峡に鉄の鎖を張り
渡していたが、王濬（しゅん）は巨大ないまつでそれを焼き切った。杜預（とよ）は

襄陽から南下し、江陵を落とした。

この頃、南征軍の作戦会議で、ある武将が作戦中止を提案した。

「百年の寇を一気に滅ぼすのは難しい。ひとまず兵を引き、再挙を期
すべきではないか」杜預（とよ）は言下に否定し、作戦継続を訴えた。その言
葉が彼の名を不朽のものにした。彼はいった、「今兵威（せい）已（すで）に振（ふる）るう、
譬（たと）えば破竹（はたけ）の如（ごと）し」と。

これより先、杜預（とよ）は長江を下る王濬（しゅん）に手紙を書き送っていた。
「ただちに建業（現・南京）に向かい、累世（るいせい）の寇（こう）を討（う）て」と。王濬（しゅん）

は流れに乗って石頭（しやうと）（現・南京）に入城し、呉主・孫皓（こう）は降伏した。

後半四行は、劉禹錫（りゅうぎょく）が眼にしたであろう情景を詠う。季節は秋で、

蘆荻（りうてき）が風に揺れていた。彼がいつ西塞山を訪れたのか、新旧『唐
書』の記述からは特定できない。左遷されて南に下る道すがら、立ち
寄ったとも推測される。その時、彼はこの山頂に立ち、長江を見下ろ
したと考えたい。そしてはるか上流の益州と下流の石頭城（しやうとじやう）を望み見た
のではないか。王濬（しゅん）の進軍からは五百年の時が流れていた。

十二時二十分、山を下る。劉禹錫（りゅうぎょく）から千二百年、詩人が見たという
故壘（こるい）の姿はすでにないが、山形（さんぎやう）は旧（きう）に依り、長江の流れを枕（まくら）としてい
た。

墮涙碑の涙

二〇〇〇年七月三十一日十六時十五分、襄樊のホテルを出発。襄陽
の護城河（濠）を右に見ながら南に向かう。十分ばかりで峴山（けんざん）に着い
た。

道を挟んで西にかなりの高さで角度を持つ山がそびえ、東にはなだ
らかな丘陵がある。西にそびえるのが峴山（けんざん）で、東にあるのはその裾野

である。新しく作られた道路と鉄道が、峴山けんざんの麓を切り裂いて生まれた地形だった。六年前（一九九四年）は丘陵の上に民家が二、三軒あっただけなのに、道の両側に家がびっしり建ち並んでいる。東側のそれは煉瓦を積んで化粧タイルを貼り付けた平屋で、食堂、食品を売る商店などが連なっていた。

崔氏さいと張氏が店の人々に聞いているが、思わしい答えがないらしい。しばらくして、崔氏が路地から顔を出した。我々を手招きしている。車を降りると、日ざしが肌を刺すように強かった。

——私はこの川を探していました。

と崔氏さいがいう。川とも呼べぬ細い流れが、草むらの中で光っている。後で地図を調べたら、劉備が馬を躍らせて飛び越えた檀溪から流れ出る川だった。

——この地図を見るとね、石碑は鉄道と川の間にあります。だから、あのあたりです。

丘陵に沿って数軒の家が散らばっている。川の幅は十メートルほどだが、直接渡る方法はない。いったん国道までもどつてまわり込んだ。

そこは細長いコンクリートの板が整然と並んでいて、どうやら建築資材置き場のようである。すぐ横の戸口に立つ若い母親に聞いたが、不知道しちだう（知らない）という。通りかかった大媽ダマ（おばさん）の答えも同じだった。

三国時代末期、晋の將軍・羊祜じやうこはここ襄陽（現・襄樊じやうはん）に駐屯し、西陵（現・宜昌）を守る呉の陸抗と対峙した。互いの力量を見抜いた二人は無益な出兵をやめ、晋・呉の国境には一足早い平和が訪れた。陸抗の贈った酒を羊祜はためらわず飲み、羊祜の届けた薬を陸抗は服用して疑わなかった。この二人の交流は、中国の歴史でもっとも

美しいページの一つである。

二年後、陸抗が世を去った。羊祜は初めて「呉討つべし」との意見をあげた。しかし重臣の反対に会った武帝（司馬炎）が決断できぬまま、羊祜は五十七年の生涯を閉じた。訃報を聞いた襄陽の民は泣き、国境を守る呉の將士も泣いた。三国志の登場人物で、その死を敵が悼んだと記録されるのは、羊祜ただ一人である。彼が後事を託したのが杜預だった。

羊祜は生前、折りにふれて峴山に登り、酒を飲み、詩を詠じて飽きなかった。そこで襄陽の人々は峴山に羊祜の記念碑を建てた。見る者すべてが涙を流したので、杜預はこれを「墮涙碑」と呼んだ。我々が探しているのは、この石碑である。

要領を得ぬまま、車に帰る。ふと見ると、資材置き場の端の一段高くなった部分に、妙なものが立っている。細長い形といい、人の背丈ほどの高さといい、まさに石碑である。しかし全体が左に傾き、そばには砂利が積み上げられている。念のため近づいてみたが、文字は刻まれていなかった。どうやら石碑になる前の石らしい。

崔氏の判断で、近くにある村民委員会を訪ねた。二階にある事務所から、張氏が二人の案内人を連れてきた。一人はランニングシャツに半ズボン、もう一人は半袖シャツに灰色のズボンをはいている。初老の二人はどちらも赤銅色に日焼けしていた。

車はいらない、と二人が歩き出す。向かったのはやはりあの資材置き場である。例の奇妙な石を手で示し、これだ、という。そこにはたしかに「墮涙碑」の文字が刻まれている。さっきぼくが見たのは、この裏側だったのだ！石を彫っただけで色を施さず、にじんだような独特の書体で書かれているから、そうと聞かない限り、見すごしてしまつたに違いない。石碑を守る碑楼も四阿あずまやもなく、保護文物を示す

混凝土の標識もなかった。

晋の太康元年（西暦二八〇年）、呉を滅ぼし天下を統一した杜預は、自らの功績を記した石碑を二つ作り、一つを峴山の上に立て、一つを万山の麓の漢水に沈めた。いぶかる部下に、彼はいつた。「岸は谷となり、谷は陵となる。ここが将来、谷になるか陵になるか、誰にもわからないではないか」

それから千七百年、峴山は今も襄陽の南にそびえる。しかし、杜預の石碑は伝わらない。再建された「堕涙碑」も、建築資材と砂利の間に埋もれている。涙でにじんだような書体のせい、か、「堕涙碑」そのものが泣いているように見えた。

回馬坡の雨

二〇〇〇年八月二日、当陽から南東に向かう。

道ばたに麦城の名を冠した加油站（ガソリンスタンド）がある。

麦城の村に入ったらしい。六年前に訪れた時は文字通りの村だったが、今は建ち並ぶ家が増え、道路も舗装されて、小さな町の趣に変わっていた。

麦城の名は、関羽の最期と結びついて悲劇的な響きを持つ。前回はこの村の誰に聞いてもその遺跡のありかがわからず、関羽の部下・周倉の墓を見ただけで終わった。しかも帰国後調べてみたら、周倉は架空の人物にすぎなかった。おまけに当陽で買ったパンフレットには《麦城は沮河と漳河が合流する両河大橋付近にある》と書かれていて、さらに愕然とした。その日、我々は二度までも両河大橋を渡っていたからである。今回の訪問は、いわばその雪辱戦だ。

麦城の村からさらに東へ走ること数分、川の堤防と大きな橋が見え

てきた。目指す両河大橋である。橋のたもとで車を止め、堤防の上の道を歩く。大きな中州のように見えるのが、河の合流点だった。

二つの河を合わせた幅は二百メートル近くあるだろう。間に挟まれた三角形の土地は、その先端部分を除き、耕されて畑になっている。赤土の中に玉蜀黍や豆の植わった緑の畑が見える。堤防の道も川原も中州の岸辺も、同じ赤土の色だった。目の前の川原に青いトラックが停まり、低いモーター音が伝わってくる。何人かがホースを持ってゆつくり動くのが見える。川底の浚渫作業だろうか。対岸の川原にも青いトラックの姿があった。

麦城は、春秋時代、楚の昭王が築いたものである。吉川英治の『三国志』には『月落つ麦城』の名句があり、山城を連想させるが、実際は低地に建つ平城だった。わずかの手勢を連れた関羽が何とか持ちこたえられたのは、二つの河が天然の護城河（濠）の役割を果たしたためと考えられる。その後、度重なる氾濫と河道の変化により、城壁は寸断された。六年前の例のパンフレット（一九八六年出版）によれば、その遺構は高さ十メートル、長さ百メートルにわたって残っているという。雑誌「人民中国」の記者・龔学孺氏が八年前（一九九二年）に訪れた時、遺構の高さは三メートルだった。しかし、周辺にそれらしいものは見当たらない。

堤防に沿って、広い敷地に煉瓦塼をめぐらせた建物がある。その煉瓦塼と堤防の間に、小さな石碑が立っている。もしやと思って近づくと、農民の墓だった。崔氏が、トラクターでやって来た二人の若者をつかまえたが、やはり首を振っている。麦城のおよその位置がわかっただけで満足すべきなのかも知れない。よくよく見れば、中州の畑の一部が盛り上がり、耕されぬまま灌木が茂っている。それが自然の地形なのか人工のものなのか、この場所からは判断がつかねた。

江陵がすでに占領されていることを知った関羽は、再び道を北に取り、ひとまず麦城に入った。兵士は次々に逃亡し、手勢はわずか数百に減っていた。それを孫権の大軍が包囲した。関羽は孫権の降伏勧告を受け入れると見せかけ、ひそかに脱出した。麾下の兵はさらに逃げ、わずか十数騎を残すだけになっていた。

当陽で昼食をすませ、十三時五十分、北西へ向かう。孫権に捕われた関羽は処刑され、その首は曹操の許へ送られた。曹操はそれを洛陽郊外に葬った。関羽の首塚・関林である。胴体はここ当陽に葬られ、関陵となった。その関陵の前をすぎる。かつて劉備が惨敗し、張飛と趙雲が懸命に戦った当陽・長坂を、やがて自らが葬られるであろう場所を、関羽は十数騎とともに駆けて行ったことになる。

道は沮河を遡上する形で北へ走る。しだいに山が姿を見せてくる。遠安県をすぎる。棚鎮と呼ばれる小さな集落を左、つまり西へ折れ、山道に分け入った。地図で確かめると、そのまま北へ行く道は行き止まりで、一見脇道のようなところが本道だった。

谷が急に深まってきた。左右から迫る岩山がそそり立ち、頭上の空を区切る。澄みきった水が川床の白い岩を洗っている。羅漢峪という峡谷で、地元の人はこの空を一線の天と呼ぶらしい。かつては木々が鬱蒼と茂り、昼も暗いほどだったというが、今、山肌の中腹までをおおうのは、さほど丈の高い灌木ばかりである。

十四時五十分、谷川の向こう岸に四阿が見えた。

——あれが回馬坡です。

と張氏がいう。麦城を脱出した関羽がついに捕えられた場所である。捕えたのは呉の將軍・潘璋の部下で馬忠という。それを回馬坡、つまり馬を返したところと婉曲に表現するのは、死後、皇帝に昇格した関羽の名誉を守るためである。

谷川に架かる小さな混凝土の橋を渡る。朱色の壁を丸くくりぬいた門に、隸書で「回馬坡」と書かれている。そばの岩壁に「遠安県重点文物保護単位 三国古戦場蜀国大将関羽回馬処」の標識がある。ここに関羽を記念する碑が建てられたのは清の同治七年（一八六八年）のことで、その後、宣統元年（一九〇九年）に一度再建されている。その石碑と四阿は一九六〇年、道路工事のために破壊された。今あるのは一九八三年六月に修復したものだ。そんな由来を記した後に、この工事の寄付金リストが続く。県政府や個人の中に、地元の人民解放軍部隊の名もまじっていた。

四阿まで細い道を十メートルほど歩く。道も四阿も川岸を削った平地に作られている。四阿は朱色の柱と二層になった瑠璃瓦の屋根を持ち、その中に石碑がある。高さは二メートル余り、黒地に「嗚呼此乃関聖帝君由臨沮入蜀遇呉回馬処也」の文字が刻まれている。裏面は赤兔馬にまたがり、青龍刀を横たえた関羽の浮き彫である。碑の黒は塗ったものらしく、何カ所か色が剥がれ落ちている。関羽像の上には大きな落書きまであった。

橋の上で運転手氏が水の流れを見つめている。我々も澄みきった谷川の水を見つめ、そびえ立つ山を見上げた。道を行く車も少なく、あたりは静まりかえっている。

——いい所ですね、ここは。

崔氏がいう。関羽は、その悲劇的な最期に、申し分のない舞台を選んだといえるだろう。

——そろそろ行きましようか。

と張氏が促す。車に向かいかけた時、ぽつんと雨のしずくが落ちてきた。

——関羽の涙雨です、これは。

とうちの奥さんがいった。

関羽が捕えられた具体的な状況について、『三国志』は語らない。

『三国演義』第七十七回は、それを次のように描く。

付き従う者はわずか十数名になった。決石まで行くと、両側が山で、蘆や枯れ草、木々が錯綜している。間もなく夜も明けようとする頃、喊（こゑ）の聲が起こり、両側から伏兵が躍り出た。鈎のついた棒や投げ縄を一斉に繰り出し、まず関羽の馬を絡めて倒した。落馬した関羽は、潘璋（しやう）の部下・馬忠に捕らえられた。

地名が決石となっているのが変だし、回馬坡（は）の地形から見ても、左右から伏兵が出たというのも無理がある。七百年後、わざわざ現地を確かめに来る物好きがいろいろな、羅貫中は想像もしなかったに違いない。

『資治通鑑』は、関羽が麦城を脱出したのを建安二十四年（西暦一九一一年）十一月、馬忠に捕らえられたのを十二月と記録する。当時の十二月は今の一月下旬に当たる。麦城から回馬坡（は）へ、この真冬の逃避行を『三国演義』は一夜のこととして描くが、実際は少なくとも二日は続いたことになる。

車は羅漢峪（よ）を走り抜け、峠越えにかかった。雨で気温が下がり、冷房を切っても快い。行く手にそびえる山々は岩肌が露出し、鋸の歯のように峰を連ねている。三峽から宜昌に続く山並みだった。

道は峠の上で二つに分かれる。その丁字路に沿って、数軒の家が散らばっている。我々は左、つまり南に折れ、宜昌を目指す。右、つまり北に向かえば、劉封・孟達が守っていた上庸に至るはずである。もし回馬坡（は）を突破していたら、関羽はどちらの道を選んだだろうか。本降りになった雨の中、我々は長い坂道を宜昌に向かって下つていった。

輪タク華容道を行く

二〇〇〇年八月四日九時、荊州（けいしゅう）を出発。沙市区を抜け、並木道を東南へ延々と走った。雨は途中で上がったが、雲がたれ込めた陰鬱な空である。今日の目的地は華容道という。赤壁の戦いに敗れた曹操が逃走した道である。

武漢の張氏は新潟大学に留学したことがある。

——寒いし、雪もたくさん降るから、びっくりしたでしょう。

——はい。武漢では雪はほとんど降りません。だからほんとにびっくりしました。

雪道を歩いていて転び、大ケガをして一カ月入院したこともあるという。

——日本の友達が毎日病院に来てくれました。これがその時の傷です。

と手で示した。いわれてみると、あごに小さな痕が残っている。

——一生忘れない思い出です。

と張氏は笑った。

十一時、監利の町に入った。中心街を右折し、東に向かう。少し幅の狭まった並木道を走った。両側は水田、その先にまた並木があり、さらに水田が続く。幾重にも連なる並木の向こうには、長江の本流が流れているはずである。道に沿って小さな水路が現れた。家鴨の群が泳いでいる。時折り水面に網が仕掛けられているから、魚が捕れるのだらう。岸に建つ農家から水路に通じる小さな階段で、おばさんが洗濯をしていた。

張氏と運転手氏が何度も道を聞くが、思わしい返事がない。十二時、道ばたに客待ちの輪タクが集まっている。張氏が降りて尋ねる

と、運転手の一人が熱心に話しかけてきた。振り返って張氏がいう。

——この人が場所を知っています。今から案内してもらいます。

張氏が輪タクに乗り、我々の吉普で追いかけることになった。オート三輪の荷台に幌をかぶせ、両側に木のベンチを取り付けたものである。荷台に手をかけたところで輪タクが走り出し、張氏があわてて飛び乗った。走ること数分、何もない道端で輪タクが停まった。

張氏が道の左を手で示した。

——先生、この道が華容道です。

本道から北へ分かれる農道である。道の左に溝のような細い水路、右に民家が点々と見える。あとは一面の水田だった。あたりの眺めはしごく平凡で、何の標識もない。

——見つけましたね、崔さん。

——はいはい。あの人はあのようにいいましたけれども、私は信用していません。ここの村民委員会へ行くようにいいました。

崔氏はあくまで慎重だ。ここまで来ることは二度とない。あと一歩のところで逃しては一大事、とその顔には書いてあった。

輪タクが農道に向かう。我々もその後を追った。凸凹道で震動が激しく、小柄で軽い張氏の体は何度も木のベンチから飛び上がる。ついに張氏は座るのをやめ、中腰になって横の鉄柵につかまった。その様子がおかしいとうちの奥さんが笑う。

輪タクは農道を右に折れ、一段と狭い道に入った。小さな村が現れた。チャボの群が時ならぬ侵入者に驚いて逃げまどう。輪タクは農家の軒先を抜け、土壁を曲がって姿を消した。我々の吉普も曲がろうとして、そこでブレーキを踏んだ。土壁の向こうで村は終わり、その先は急に狭い畦道になっていた。張氏が輪タクから帰ってきた。

——先生、もう少し行くと石碑があります。そこまで行きますか。

——行きましょう。

ぼくより早く崔氏が答えた。運転手氏を残し、全員が輪タクに乗り移る。さすがに目に見えて速度が落ちた。汚れたプラスチックの窓越しに、激しく揺れる速度計の数字をのぞくと、時速は十二、三キロと読み取れた。

三、四分走って停まる。畦道の右に混凝土で固めた石碑がある。黒地に白く隷書で「三国遺跡 華容古道」と記されている。高さ・幅ともメートルを越える大きさである。地元・監利県の人民政府が建てたものだ。張氏によれば、華容道はここから毛市というところまで、約十キロ続いているという。我々はその入り口の二、三キロを吉普と輪タクで走ったことになる。

——やりましたね、崔さん。

——はいはい。

崔氏の表情がようやくゆるんだ。

——先生、さっきのところまで歩いて帰りましょう。

——いいですねえ。

輪タクを先に帰し、四人で歩く。村を出る部分は狭かったが、それ以外は輪タクがすれ違えるほどの道幅がある。左右から木が茂り、伸びた枝が緑の門を作っている。森のような一角をすぎると視野が広がり、両側は水田になった。時々、小さく白い花をつけた畑がある。うちの奥さんに聞くと、ゴマだという。昨夜からの雨で、空気も土も適度に湿って快い。珍しく蟬は鳴かず、時折り鳥の声がする。振り返ると、曹操が南郡（現・荊州）を指して逃れた道は、木々の間を屈曲しながら延びていた。

『三国演義』第五十回。

赤壁から逃れた曹操は、夜明けの光の中で周囲の地形を見渡し、突

然笑い出した。何事かと尋ねる部下に、曹操はいった。「周瑜・諸葛亮は智謀が足りない。私ならここに伏兵を配置しておくのだが」その言葉が終わらぬうちに、趙雲率いる軍勢が一斉に立ち、襲いかかった。

あわてて逃げた曹操たちは、大雨を避けて林の中で食事をとった。すると、またまた曹操が笑い出した。「諸葛亮も周瑜も智謀が足りない。私ならここに部隊を伏せておくのに」

そこへ張飛の軍が現れた。張飛と聞いて人々は肝をつぶし、命からがら逃げた。行く手の道が二つに分かれている。一つは平地を行く大道で、もう一つは細い山道である。物見によれば、山道の数カ所で煙が上がついているという。それを聞いた曹操は、山道を選んだ。驚く部下に、彼はいった。「諸葛亮は策略家だ。わざと山道に煙を上げ、我々を平地に誘い込んで迎え撃つつもりではない」

険しい山道を越え、平地を数里行ったところで、曹操がまた笑い出した。「周瑜・諸葛亮はしよせん無能の輩だ。ここに兵を伏せておけば、我々は手を束ねて降伏するはかなかったものを」

そこへ一陣の喊声とともに、伏兵が現れた。先頭に立つ武將は関羽である。全員が顔色を失った……

この間、諸葛亮は、曹操の心理と行動を掌に指すように予見したことになる。『三国演義』は事あるごとに諸葛亮の神算鬼謀を強調するが、ここはいささか度がすぎる。魯迅のいう《諸葛亮の智謀を描こうとして、かえって妖怪じみた》個所ではないか。

さてこの一段、趙雲と張飛はほんの添え物で、主眼は関羽と曹操の再会にある。ここで関羽の姿を見て、曹操は死を覚悟した。しかし参謀・程昱の言に従い、関羽の情に訴えようと決意する。以下、『三国演義』を続ける。

曹操は関羽に呼びかけた。「將軍、一別以来お変わりないか」関羽が答えた。「それがし、軍師(諸葛亮を指す)の命により丞相(曹操を指す)をお待ち申し上げておりました」

「戦いに敗れここまで来たが、もはや逃れる道がない。將軍、どうか昔の情誼を思い出してはくれまいか」

「それがしも丞相の厚恩を忘れたことはございません。しかし白馬の戦いで顔良と文醜を斬り、十分お報いしたと考えております」

「では將軍が五関を突破し、その守將を斬ったことはどうなる」
「それは……」

関羽は義に厚く情にもろい。哀願する曹操とその部下たちを攻撃することはできず、ついに見逃してしまった。関羽がそうするであろうことも、諸葛亮は見抜いていた……

曹操に降伏した関羽は劉備の消息を知り、その許へ駆けつけるため、千里の旅に出発する。劉備の二人の夫人を守りつつ、途中、五つの関所を突破して六人の守將を斬った。ところが曹操はその罪を問わず、関羽の辞去を許した。華容道での二人のやりとりは、これを受けている。

関羽がいったん曹操に降り、顔良を斬ったこと、その後、劉備の許へ去ったことは紛れもない史実である。しかし五関突破は存在しない。関羽一行は許昌から北の官渡へ向かうのに、はるか西方の洛陽を通っている。この不可解な行程自体、これが虚構であることを示す。だとすれば華容道での二人の再会もあり得ない。五関突破に基づく曹操の命乞い自体が、あり得ないからである。

(追記 現代中国の研究者・張志和氏という。『三国演義』の原型となる物語を語っていた講釈師たちは、歴史的知識を欠いてお

り、曹操の拠点を長安と思っていた。その場合、関羽が袁紹の許に向かうのは、五関突破が自然な行程となる。その後、誤りに気づいて都を許昌に戻したが、五関突破の物語はそのまま残された。その結果、今日見られるような矛盾が生じた、という）

第五十回を大きく見れば、関羽と曹操は、諸葛亮の予見通りに動く操り人形にすぎない。にもかかわらず、ここでの二人の姿は魅力にあふれている。彼らのやりとりは臨場感に富み、諸葛亮の智謀が色あせるほどだ。羅貫中は、五関突破という虚構に華容道というもう一つの虚構を重ねることによって、物語にみごとな決着をつけたのである。

見渡したところあたりはまったくの平地で、曹操が誘い込まれた陰阻な山道などどこにもない。あらためて『三国志』『武帝紀』を読んできた。裴松之の注に引かれた「山陽公載記」にいう。

曹操は軍を率いて華容道から歩いて帰った。泥濘に出会って道が通じず、天候も大風になった。曹操は弱った兵士たちを総動員し、草で泥濘を埋めさせた。それでようやく騎馬が通過することができたが、兵士たちは人馬に踏みつぶされ、泥濘に落ちて死ぬ者がはなはだ多かった。泥濘を抜け出した時、曹操は大いに喜んだ。

一読してわかるように、山道の話はどこにも出てこない。当時このあたりは雲夢沢と呼ばれる巨大な湖が広がる湿地帯で、曹操が苦しんだのはその泥濘だった。胸を衝かれるのは、行軍の悲惨さである。簡潔な記述の中から、血にまみれて泥濘に沈む兵士たちの悲痛な叫びが聞こえてくる。その最後に、危地を脱した曹操の高笑いが響く。

曹操はすべてを犠牲にして逃げた。領民を見捨てることができず、自らを危機にさらした劉備とは好対照である。一将功成つて万骨枯るというが、曹操はその勝利だけでなく、敗走をも部下の血と肉である

なっていた。我々が歩いたあの牧歌的な道は、名もなき兵士たちの墓標だった。